

## イザヤ書28-29章 「みことばに鈍い心」

### 1A 物質的豊かさ 28

#### 1B 肉の欲 1-13

#### 2B 陰府との同盟 14-29

### 2A 宗教的豊かさ 29

#### 1B 祭壇の炉となる祭り 1-8

#### 2B 深い眠りの霊 9-16

#### 3B 心の貧しき者の悟り 17-24

## 本文

私たちは、24-27 章で、大患難を経て、主が来られることにより、神の国とその都が回復する預言を見ることができました。

そして今晚は、28-29 章です。再び、ユダの人々の心にある問題を主は取り扱われていきます。これまでもそうでしたが、主は何かを語られる時に一連の出来事を終わりまで語られて、再び戻ってきてそして終わりまで語られる、というように語られます。28 章は、さらに彼らの中にある霊的問題について、突っ込んだ内容を語られています。その背景はエジプトとの軍事同盟です。ヒゼキヤ王は、主に抛り頼んでいたのですが、ユダの民や側近の一部が、エジプトに頼るという方向に持って行って、王もその路線に引きずられていたようです。主ではないものに頼っていることによって、さまざまな霊的問題が出ていることについて、主は預言によって教えておられます。

### 1A 物質的豊かさ 28

#### 1B 肉の欲 1-13

<sup>1</sup> わざわいだ。エフライムの酔いどれが誇りとする冠、その美しい飾りの、しぼんでゆく花。これは、酔いつぶれた者たちの、肥えた谷の頂にある。<sup>2</sup> 見よ、主のもとには激しく力強いものがある。それは、突き刺さり荒れ狂う雹の嵐のようだ。激しい勢いで押し流す豪雨のようだ。主は御手をもってこれを地に下される。<sup>3</sup> エフライムの酔いどれが誇りとする冠は、足の下に踏みにじられる。<sup>4</sup> 肥えた谷の頂にあつてこれを麗しく飾る花もしぼみ、夏前の初なりのいちじくの実のようになる。だれかがそれを見つけると、すぐに手に取り、呑み込んでしまう。

主は初めに、エフライムに対して語られています。エフライムは北イスラエルの代表的な部族であり、北イスラエル王国の全体に語られています。北イスラエルが、その統治の後期にヤロブアム二世によって国が非常に大きくなり豊かになったことは覚えているでしょうか？今も遺跡を見ますと、ヤロブアムの時代のものであるという説明が多いです。それだけ、栄えていたので、遺跡も際

立っています。その時、彼らはこの世の楽しみに酔いしれていました。そこで主が、これらを一気に無くす、ご計画を持っておられました。それがアッシリアによる侵略です。紀元前722年に、首都サマリヤを陥落させました。

<sup>5</sup> その日、万軍の主は、民の残りの者には 輝かしい冠、栄えの飾り輪となり、<sup>6</sup> さばきの座に着く者には さばきの霊となり、 攻撃して来る者を城門で追い返す者には 力となられる。

「その日」という言葉から始まっています。主が北イスラエルをこのように踏みにじるに任せられたのですが、終わりの日には残された者たちには、美しい冠と栄えの飾り輪を与えられます。主ご自身の救いを与えられるということです。そして、これら残りの者たちが、御国においては裁きの座に着くということです。キリスト者にも同じ約束が与えられており、今の世に迫害を受けたり、苦しみを受けても、キリストが王の御座についておられる時に、私たちも裁きの座に着くことが約束されています。(例：I コリ 6:2)そして、彼らを攻撃する者があっても、彼らのために力となってくださると約束されています。

<sup>7</sup> しかし、これらの者も、ぶどう酒でよろめき、強い酒でふらつく。祭司も預言者も強い酒でよろめき、ぶどう酒で混乱し、強い酒でふらつく。幻を見ながらよろめき、さばきを下すとき、よろける。<sup>8</sup> どの食卓も吐いた物であふれ、余すところもない。

イザヤが、残された者たちのために戦ってくださることを語っているのですが、そのことについて全く意に介さない者たちの姿です。泥酔しています。それが祭司や預言者たちでだというのが、恐ろしいです。幻を見ながら酔いしれてよろめき、その務めを行なっているのです。エフライムにあったその豊かさの中に、彼ら自身も浸ってしまったということです。これは実に残念なことですが、物質的に栄えた教会の指導者たちの中に、この世の繁栄と何ら変わらないのではないかと思われる人々がいることは確かです。

<sup>9</sup>「彼は知識をだれに教えようとするのか。知らされたことをだれに悟らせようとするのか。乳離れした子にか。乳房から離された子にか。<sup>10</sup> 彼は言っている。『ツアウにツアウ、ツアウにツアウ、カウにカウ、カウにカウ、あっちにゼエル、こっちにゼエル』と。」

祭司や預言者なのに酔いしれているのですが、こういった人々に限って、イザヤのような預言の言葉を嫌います。それは、あまりにも単純で、反復しているものであると思っていただけからです。信者には、教会指導者が言っていることを簡単には批判できないでしょう。けれども、知識的に、何か難しいことを言っている、「結局、これはプライドの問題ではないですか？」と、思われる事柄は実に多いです。ゴスペル・グループの人たちから聞いた話です。ある教会で歌ったら、神学生たちが驚いて後で近づいてきました。歌っている彼らが、笑顔で歌っているのが驚いたとのこと。それ

で、自分たちがいつも歌っているのは、これです、と言われて出してきたのが、「カラオケ歌集」だったそうです！神学校では、難しい知識を学んでいますが、やっているのは、お酒を飲んでカラオケを歌っている、ということです。

そして、子供が基礎的なことを繰り返すときの言葉になっています。「ツアウにツアウ、ツアウにツアウ」は、「戒めに戒め、戒めに戒め」です。「カウにカウ、カウにカウ」は、「規則に規則、規則に規則」です。「あっちにゼエル、こっちにゼエル」は、「ここに少し、あそこに少し」という意味です。

伝道者の書に、「神は人を真っ直ぐな者に造られたが、人は多くの理屈を探し求めたということだ。(7:29)」という言葉があります。人間はもともと真っ直ぐに造られています。幼子でも真理が分かるように、信仰という手段で私たちに神との関係を教えています。ところが、それを人間は拒みます。基本的なことさえ出来ていないのに、そのできていないことを改めないで、もっともっと複雑なことを考えようとするのです。高尚なことを求めて、パウロの朴訥な言葉を見下げていたコリントの教会に対して、十字架の言葉の単純性について話しました。「I コリ 1:18-20 十字架のことは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」と書いてあるからです。知恵ある者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の論客はどこにいますか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」

<sup>11</sup> まことに主は、もつれた舌で、異国のことばでこの民に語られる。

そんなにも、分かりやすい言葉で侮るのであれば、あなたがたに分からない言葉を与えようとして、この裁きのことばを語られています。それが、異国のことばです。これは、アッシリアがイスラエルを侵略して、イスラエル人には理解できないアッシリアの言葉で語る時に、それが神の裁きだということです。私たちが、明らかな神のことばを聞いても、頑なにしている時に、だんだん、神の声が聞けなくなっていくます。

<sup>12</sup> 主は彼らに、「ここに憩いがある。疲れた者を憩わせよ。ここに休息がある」と言われたのに、彼らは聞こうとしなかった。<sup>13</sup> 主は彼らに告げられる。「ツアウにツアウ、ツアウにツアウ、カウにカウ、カウにカウ、あっちにゼエル、こっちにゼエル。」これは、彼らが歩くとさうしに倒れて砕かれ、畏にかかって捕らえられるためである。

主のことばの中に憩いがあります。イエス様が言われたように、この方のところに来れば、休むことができます。そして、私たちは主の命令を聞いた時に、重荷を負わせられるのではなく、むしろ命令こそが私たちが重荷を主に持っていくことのできる休みを得ることができます。そのことを、あまりにも単純なことばだとして退けると、その明らかなことばにしたがって、主は彼らが倒れるまま

にされます。捕らえられるままにされます。聖書をそのとおり受け取らない人々が、教会の中にもいますが、そのまま受け止めない人々がいます。その人たちの生活は、確かに、つまずきが多いです。倒れる、罨にかかることが多いです。

## 2B 陰府との同盟 14-29

<sup>14</sup> それゆえ、嘲る者たちよ、主のことばを聞け。エルサレムでこの民を治める者たちよ。<sup>15</sup> あなたがたがこう言ったからだ。「われわれは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。たとえ、洪水が押し寄せても、それはわれわれには届かない。われわれは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」

13節までは、実は前座でした。主が語られようとしていたのは、ユダに対してです。既に北イスラエルのアッシリア捕囚は実現していました。北イスラエルが、酔いどれになっていて、主の言葉を聞かないでいて、それでアッシリアに捕え移されたということを南ユダは見ていました。それで、「あいつら馬鹿だな。全く信仰がなっていない。」とあざけていたのです。けれども、実は自分たちも、エジプトという世の力に頼っていることを主は、明らかにされています。

「われわれは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。」というのは、イザヤが彼らに語った言葉です。エジプトと軍事同盟を結んだが、それはあなたがたに死をもたらすものだ、陰府に下らせるものだということです。エジプトは助けにならず、アッシリアがエルサレムを包囲するだろう、ということです。けれども、彼らは、「たとえ、洪水が押し寄せても、それはわれわれには届かない。」と言っています。アッシリアからの水が洪水となって、ユダにまで及ぶという預言に対して、「届くわけないだろう、あなたがたが死の契約があるのだから。」と言っているのです。そして、「われわれは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」というのもイザヤが語っていた言葉を当てこすって話しています。

このようにユダは、他の人たちを見て、その愚かしさを笑っているのですが、実は自分自身に同類の問題があることに気づきませんでした。まやかし、偽りとあるように、自分は大丈夫だとしていて、自分自身を欺いていたのです。神を信じていると言いながら、そうではなく実際は他の人間的なものに拠り頼んでいるということです。

<sup>16</sup> それゆえ、神である主はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊い要石。これに信頼する者は慌てふためくことがない。

要石を信じる者は慌てふためくことはないのです。私たちの生活は、信じていく、しかも忍耐して待ち望むところに立ちます。この方は、試みを経ました。しかし、それでも耐久し、堅く据えられて

いるのです。十字架に向かう道、それを経て、よみがえり、神の右に着座しているのです。この方、イエス・キリストのみによって、建て上げられます。

<sup>17</sup> わたしは公正を測り縄とし、義を重りとする。雹はまやかしの避け所を一掃し、水は隠れ家を押し流す。<sup>18</sup> あなたがたの、死との契約は解消され、よみとの同盟は成り立たない。みなぎる天罰が押し寄せると、あなたがたはそれに踏みにじられる。<sup>19</sup> それは押し寄せるたびに、あなたがたを捕らえる。しかも朝ごとに押し寄せる。昼にも夜にも。この知らせを悟るなら、ただ恐怖あるのみ。<sup>20</sup> まことに、寝床は身を伸ばすには短すぎ、覆いも身をくるむには狭すぎる。」

ユダは、要石に頼ることをせず、エジプトとの同盟に頼りました。しかし、エジプトから助けはきませんでした。主は、ご自分の公正と義にしたがって、その隠れた計画を台無しにされたのです。エジプトのほうに頼ったのでアッシリアが勢いづいて、ますますユダの町々を倒していきました。アッシリアのほうの文献では、ユダの 64 もの町々や居住地を征服したと書かれています。それで、毎日、肩身の狭い思いをしながら過ごさなければいけなくなっていました。

<sup>21</sup> 実に、主は起き上がられる。ペラツィムの山での時のように。主は奮い立たれる。ギブオンの谷での時のように。みわざを行われるが、そのみわざは不可思議。働きをされるが、その働きは意外。<sup>22</sup> だから今、あなたがたは嘲ってはならない。あなたがたを縛るかせが、きつく締まることのないように。私は万軍の神、主から、全世界に下る定められた全滅について 聞いているのだ。

ペラツィムの山については、ダビデがペリシテ人に勝利した出来事です。もう一つ、ギブオンの山は、ヨシュアがカナン人の王5人に勝利した出来事のことを指しています。ダビデの時は、彼がイスラエルとユダの統一王として即位した時です。ペリシテ人がレファイムの谷間に侵入しました。そこで、ダビデが彼らを打ったのですが、「歴代誌第一 14:11「神は、水が破れ出るように、私の手を用いて私の敵を破られた。」という快進撃でありました。そしてヨシュアにおいては、空に上っている太陽、また月が留まれと言ったら、留まった、それで五人の王の軍を追撃できた、ということです。

ここで主が言われているのは、このような通常とは異なる、比類なき大勝利を与えるということです。彼らはエジプトに抛り頼んだことによって、それでかえって痛手を被っていました。その契約によって、かえって自分たちに枷をかけていました。しかし、主は彼らの愚かさを、エルサレムをアッシリアに包囲させて、それからアッシリアを一気に倒すという大きな御業によって明らかにする、ということです。

<sup>23</sup> あなたがたは、私の声に耳を傾けて聞け。私の言うことを注意して聞け。<sup>24</sup> 農夫は種を蒔くために、いつも耕してばかりいるだろうか。土地を起こし、ならしてばかりいるだろうか。<sup>25</sup> その地面をならしたら、ういきょうを蒔き、クミンの種を蒔き、小麦を畝に、大麦を定まった場所に、裸麦をその



境に植えるではないか。<sup>26</sup> 農夫は厳しく指導され、彼の神は彼に教える。<sup>27</sup> ういきょうは打穀機で打たれず、クミンの上では脱穀車の車輪を回さない。ういきょうは杖で、クミンは棒で打たれるのである。<sup>28</sup> パンのために麦は砕かれるが、打穀をいつまでも続けることはしない。脱穀車の車輪を回すことはしても、馬がこれを砕くことはない。<sup>29</sup> これも万軍の主のもとから出ること。その摂理は奇しく、その英知は偉大である。

イザヤは、とても分かり易く話すために、例えを用いています。私たちは農耕をすることはないので、かえって分かりづらいですが、イエスもたくさん農耕の喩えによって話しておられましたね。ここでの要点は二つあります。一つは、「いつまでも同じことをしているのではない」ということです。もう一つは、「異なる働きがある」ということです。農作業においても、神の導きで、農夫がいつも同じ作業をしているのではなく、次の作業を行い、それから種ごとに異なる脱穀の仕方があり、いつも同じ脱穀ではないのだ、というのです。ここは、とても大事ですね。

私たちはとかく、「これまでこうだったのだから、これからもこうなるだろう。」と考えてしまいがちです。だから、彼らは敵国が迫ってきた時に、他の国の助けを頼りにしたのです。主がこれまでと違った、意外なことを行われることを想定しないのです。しかし、御霊の働きによれば、これまでにない働きというものがあるのです。ですから大事なことは、イエス様という石にいつも断ち続けることです。この方の中にいることは、しんどい作業です。長いこと、何も起こっていないように見えます。いつもと変わらないように見えます。けれども、主はご自分の時に、比類なきことを行われます。

## 2A 宗教的豊かさ 29

主は続けて、29 章で、エルサレムにある霊的な問題について語られます。それは、宗教的になっているが、主に立ち返っていないということです。

## 1B 祭壇の炉となる祭り 1-8

<sup>1</sup>「ああ、アリエル、アリエル。ダビデが陣を敷いた都よ。年に年を加え、祭りを巡り来させよ。<sup>2</sup> わたしはアリエルを虐げるので、そこにはうめきと嘆きが起こり、わたしにとっては祭壇の炉のようになる。<sup>3</sup> わたしは、あなたの周りに陣を敷き、前哨部隊で囲み、あなたに対して壘を築く。<sup>4</sup> あなたは低くされ、地の中から語りかけ、あなたのことばは、ちりの中からつぶやく。あなたの声は、死人の霊のように地の中から出て、あなたのことばは、ちりの中からささやく。

ここでのアリエルは、エルサレムのことです。「アリエル」は、二つの意味があります。一つは、「神の獅子」です。ダビデが陣を敷いた町、祭りを例年行なっている町は、勇ましく、壮健さがあります。ダビデが神の箱をエルサレムに持ってくる時、彼が力いっぱい主の前で踊ったことを思い出してください。そしてもう一つの意味は、2節にある「祭壇の炉」です。幕屋あるいは神殿の外庭に、青銅の祭壇がありますね。アリエルには、この意味もあります。

つまり今、勇ましく、壮健な町が、祭壇の炉のように、火の試練を受けているということです。エルサレムがアッシリアに包囲されています。そこで、これだけ勇ましく大きな声を出していたエルサレムが、敵に包囲されているので、大きな声を出せず、地の中でささやくように低められるということです。つまり、宗教的に行いはしっかりやっているけれども、いざという時に、その勢いが一気にしぼんでしまうということです。

<sup>5</sup> しかし、敵の群れは細かいほこりのようになり、横暴な者の群れは吹き飛ぶ籾殻のようになる。しかも、それは突然、不意に起こる。<sup>6</sup> 万軍の主はあなたを訪れる。雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって。

主がこれから、火のように燃えるような激しい働きをエルサレムのためにしてください。アッシリア軍が取り囲んでいますが、それを一挙に滅ぼされます。

<sup>7</sup> アリエルに戦いを挑むすべての民の群れ、これを攻めて、取り囲み、これを虐げる者たちはみな、夢のようになり、夜の幻のようになる。<sup>8</sup> 飢えた者が夢の中で食べ、目が覚めると、その飢えは満たされず、渴いている者が夢の中で飲み、目が覚めると、実に疲れて喉が渴いているように、シオンの山に戦いを挑むすべての民の群れもこのようになる。」

アッシリア軍が、エルサレムを取り囲んでいたのが、まるで夢のように実体のないものに感じてしまうほど、主が彼らを倒してしまうということです。

## 2B 深い眠りの霊 9-16

<sup>9</sup> 驚き、たじろげ。目を閉ざされて、盲目となれ。彼らは酔うが、ぶどう酒のせいではない。ふらつくが、強い酒のせいではない。<sup>10</sup> 主はあなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、預言者というあなたがたの目を閉ざし、先見者というあなたがたの頭をおおわれた。

主の大いなる救いに対して、彼らは気づいていません。預言者たちが、そのことに気づいていないのです。眠りの霊が注がれてしまっています。主のみことばを取り次いでいる者たちが、今の時のことを語れなくなっているというのは、実に皮肉であり、厳しいことです。

<sup>11</sup> そのため、あなたがたにとっては、すべての幻が、封じられた書物のことばのようになった。読み書きのできる人に渡して、「どうか、これを読んでください」と言っても、「それは封じられているから読めない」と言い、<sup>12</sup> また、読み書きのできない人にその書物を渡して、「どうか、これを読んでください」と言っても、「私は読み書きができない」と答えるであろう。

彼らは言い訳をいいます。一つは、「それは封じられているから読めない」というものです。聖書

の解き明かしをすることを、預言者たちができないと言っているのです。封じられているから、できないのだと言っています。そして、もう一つは「私は読み書きができない」という言い訳です。

主への祭りのように、宗教的活動はしていることはしているけれども、主の言葉に対してこのような態度を取っていると、主が何を今、行なわれているのか、何を語っておられるのかが分からなくなります。しばしば聞きますね、「黙示録は、封じられた書物だ。」と。しかし、黙示録の元々の意味は、「啓示」です。神がその意味を隠すために語られたのではなく、むしろ隠れているものを、一気に全開している書物であります。主が語られたことは、明らかにそこで語られているように受け取ればよいのです。それを、自分の願望や理解、そうしたものを先行させているので、自分に合わせて読んでいこうとしてしまうために、封じられた書物になってしまうのです。

そして、「私は読み書きができない」という言い訳は、「私は、神学校に行っていないし、聖書教育を受けていないので、分かりません。」ということです。そうではありませんね、そのまま聖書を読んでいけばよいのです、分からないこともあるでしょう、しかし主が語られます。自分で本文を読んで、それでそのまま主が語られることに聞くのです。

<sup>13</sup>主は言われた。「それは、この民が口先でわたしに近づき、唇でわたしを敬いながら、その心がわたしから遠く離れているからだ。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことである。」

イエス様がここのイザヤ書の言葉を何度も、ユダヤ人宗教指導者に対して、彼らのしきたりについて非難される時、それを行われました。宗教的になっているのに、心がそこにあらずなのです。

私たちが、主の教えに対して心の感動がなくなる時に、主から聞けなくなる時に、心がいつの間にか離れていきます。確かに、教会には足を運ぶでしょう。そして、祈りや賛美で、主の名を唱えているかもしれませんが、けれども、心が離れているのです。そして、そのような宗教的行事になっていると、その動機が「人に言われたから」という、人の教えになってしまいます。「誰々にこう言われたから」ということだけの礼拝です。

<sup>14</sup>それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び、不思議なこと、驚くべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」

主は不思議なことをされます。不思議というのは、神にしか使われない言葉です。私たちの思いを超えたところの業です。主は、知恵があるとされる者たちが、どうしても分からないようにさせて、ご自分の働きを行なわれます。今、そんな時代に入っていますね。主のなされていることが、分からない時代に入っています。そこでしっかりと、御言葉に謙虚に聞き入らないといけない時になっ



ています。それをしていないと、この人が教会について、聖書について権威者だと言われている人が、説明できないようなことが起こります。主が知者を愚かにされているのです。

<sup>15</sup> わざわいだ。主に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らは闇の中で事を行い、そして言う。「だれが私たちを見ているだろう。だれが私たちを知っているだろう」と。<sup>16</sup> ああ、あなたがたは物を逆さに考えている。陶器師を粘土と同じに見なしてよいだろうか。造られた者がそれを造った者に「彼は私を造らなかった」と言い、陶器が陶器師に「彼にはわきまえがない」と言えるだろうか。

エジプトとの同盟をアッシリアに知られないように結んでいることを、指しています。アッシリアに知られないようにやっていることを、実は主ご自身に知られないようになっていくように語られています。そうです、主ご自身がアッシリアを通してユダに懲らしめを与えようとされているのですから、そのまま主の前に出て行って、自分の心のうちにあることを明かさないといけません。

それなのに、自分たちで計画を立ててうまくいっているのです。私たちはここに書かれているように、主の前に自分のことを持っていくこと、そのまま心を注ぎだして祈ることをしないと、自分で自分の計画を立てています。それはあたかも、神を信じていないかのようです。神が造り主なのですから、全ては明らかでこの方に申し出なければいけないのです。けれどもその反対に、「私の計画のほうが正しい」と心の中では言ってしまうのです。

### 3B 心の貧しき者の悟り 17-24

<sup>17</sup> もうしばらくすれば、確かに、レバノンが果樹園に変わり、果樹園は森に見えるようになる。<sup>18</sup> その日、耳の聞こえない人が、書物のことばを聞き、目の見えない人の目が、暗黒と闇から物を見る。

再び、終わりの日における回復したイスラエルの幻を見せています。レバノンが果樹園、果樹園が森とみなされるというのは、緑豊かになるということです。その時に、豊かな祝福を受ける人々は、「書物のことばを聞く」人々であります。ここが、28章と29章のテーマです。主の言葉を、しっかりと聞いているか、その耳が開かれているか？ということです。

そして、目の見えない人が暗闇から物を見るというのは、すごいことです。それは健常者、目の見える人でもできないこと。けれども、見えるようにされるのです。これには、へりくだりが必要です。主の語れることを乳飲み子のようなものだ、なぜ反復するのかとあざ笑っていましたね。そして、主の前に出ていき、心を開くのではなくて、自分で計画を立てて勝手に拗り頼むものを見つけてしまいます。へりくだることによって、初めて御言葉によって神の声を聞くことができます。

<sup>19</sup> 柔和な者は主によってますます喜び、貧しい者はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。<sup>20</sup> 横

暴な者はいなくなり、嘲る者は絶え果て、よこしまなことを企む者はみな 絶ち滅ぼされるからだ。<sup>21</sup> 彼らはことばで他人を罪に陥れ、城門で戒めを与える者に罽を仕掛け、正しい人を、理由もなく押しつける。

貧しい者、柔和な者がそこを受け継ぎます。イエス様が、山上の説教で語られた通りです。その横暴な者とはどういう者かと言いますと、噂話をしていること、きちんと判断している人、治めている人をあざけて、その揚げ足を取ること。ただ正しいことをしているのに、理由になっていないことでやめさせること。とても時宜にかなった、今の状況に迫った内容です。

<sup>22</sup> それゆえ、アブラハムを贖い出された主は、ヤコブの家についてこう言われる。「今からヤコブは恥を見ることなく、今から顔が青ざめることはない。<sup>23</sup> 彼が自分の子らを見て、自分たちの中にわたしの手のわざを見るとき、彼らはわたしの名を聖とし、ヤコブの聖なる者を聖として、イスラエルの神を恐れるからだ。

イスラエルの子孫が回復します。自分たちが悟っているようでまるで悟っていないという恥を、取り除くと約束しておられます。そして彼らは主を聖とする、神を恐れると言っていますね。ここが、御言葉の理解に必要なことです。御言葉を自分の知性で理解しようとする態度ではなく、主のところに行き、この方を恐れ敬って聞く、このことができ初めて主に受け入れられた者となるのです。

<sup>24</sup> 心迷う者は理解を得、不平を言う者も教訓を得る。」

私たちの霊的問題の癒しです。心の迷い、つまり、いろいろ思いが右に左に言ってしまう人、心の定まらない人が、悟りを得るので、しっかりとします。安定します。それから、不平を言う、自分のことだけを話している人が、反対に教訓を得ます。すばらしいです。主はこのために、私たちにアッシリアのような試練を与えられることがあるでしょう。しかし、それは私たちが、聖められるための訓練です。